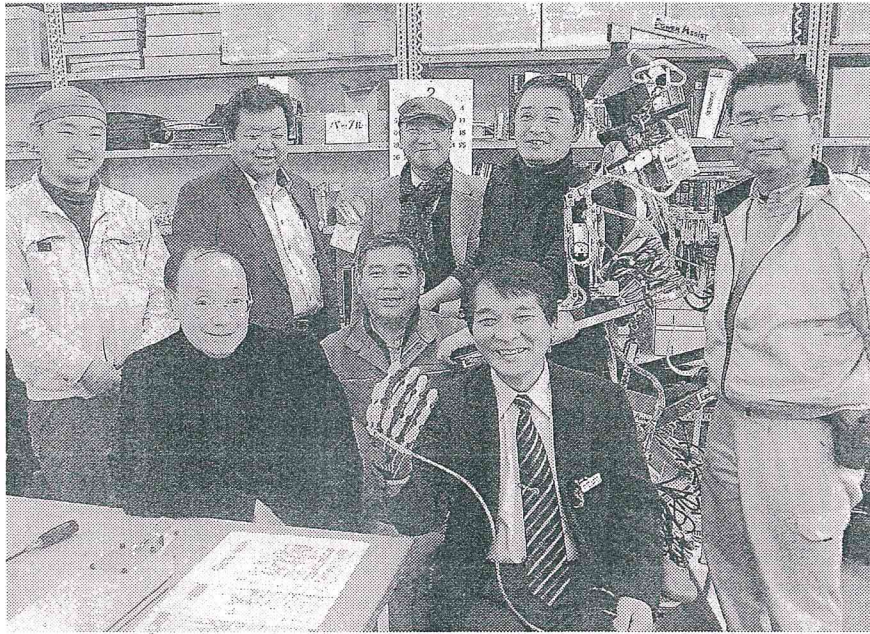


厚木をロボット拠点に

子どものころ、「鉄腕アトム」に憧れたオヤジたちが、未来の厚木をロボット開発の拠点にしようと奮闘している。神奈川県大(厚木市下荻野)の研究室とコラボしてロボットハンドを開発、介護に役立てようとしている。

(望月 寛之)

アトム世代のオヤジたち



山本教授(前列左端)とチームアトムのメンバーら。パワーアシストハンドをはめているのが井代表、後方はパワーアシストスーツ

|| 神奈川県大

大学とコラボ 介護ハンド開発

関連企業誘致も目指す

チームアトム(井浩二代表)は、厚木青年会議所のOB6人で2009年8月に設立。北村正敏幹事長(60)は「鉄腕アトム」に出てきた未来都市は当時、夢の夢だったが、現実になった。子どもたちにも夢を持ってもらえれば」と熱く語る。

漫画やアニメでアトムを見ていたころの日本がそうだったように、明確な夢や目標があれば経済も活性化していくという考えだ。

厚木の活性化のためには自立した産業が必要と判断。「車の次はロボット」と位置付け、高齢化社会を見据えた福祉ロボットの開発、販売に目をつけた。将来はロボット関連企業の誘致を目指す。

とはいえ、30〜60代のメンバー6人は写真業、印刷業、看板業などみな門外漢。そこで圧縮空気の方で重いものも持てるパワーアシストスーツを開発し、この分野の第一人者といわれる同大学の山本圭治郎教授(69)と機械工学に直談判して協力を取り付けた。

まずは山本教授が開発したパワーアシストハンドが実用化しやすいと、手作りで試作品を製作。市内外のリハビリ病院などで使ってもらい、患者の声を参考に改良を重ねた。骨折や脳機能障害などで不自由な手に手袋のようにはめ、圧縮空気で動くポンプが関節を動かすことで、機能を改善させる効果があったという。

多くの福祉機器展などにも出品し、ブースに長蛇の列ができるほどの反響があった。会場で試した半身まひの患者が「久しぶりに手のひらに風を感じた」と喜んでくれたという。

現在はさらに進化した両手タイプのマスター・スレイブを開発中。片方(健常な手)と同じ動きを、もう一方(まひしている手)が強制的にまねするというものだ。

パワーアシストハンドは福祉団体や個人へレンタルを始めているが、なお開発中で、契約できたのは1件。マスター・スレイブは春までの実用化を目指す。ともに量産化のめどが立っていないため、企業進出を呼び掛けるまでには時間がかかりそうだ。

周辺には自動車部品を扱う企業なども多く、成功させる下地は十分ある。「下請け工場も含めて厚木に産業を呼んで、産業として成り立っていくのが理想」とメンバー。さらには厚木から世界共通のロボット規格も生み出せたら、とオヤジたちの夢は尽きない。